

海外レポート

ジャパンハートこども医療センターを訪ねて

大里こどもクリニック
島袋智志

1. はじめに

我々桜の会は平成31年4月末から5月初めにカンボジアを訪問しました。目的は同国で医療ボランティアとして働いている嘉数真理子先生の激励、応援とジャパンハートこども医療センターの見学です。同センターの概要や活動内容などはTVやラジオ、講演などで何度か紹介され、また本誌でも平成30年3月の海外レポートのコーナーで嘉数真理子先生が紹介記事を書いていてご覧になった方も多いと思います。その母体となっているジャパンハートは小児外科医の吉岡秀人氏により2004年4月に国際医療ボランティア団体として設立され、2008年からカンボジアでの医療活動を開始しております。現在同センターの病院長をされている神白麻衣子氏も県立中部病院で研修をされるなど沖縄との関係も深く、我々の訪問の際も夜は懇親会に参加して頂きました。

2. 与桜の会について

ここで与桜の会（与儀公園の桜を見る会）について説明します。この会は、かつて与儀にあった県立那覇病院の時代に「こども病院」の建設を夢に見、運動し、そして実際に現在の「南部医療センター・こども医療センター」が建設され、統合・移行するその激動期に多くのことを共に経験し、様々な思いを共有した小児科医・小児外科医をメンバーとして作られた会ですが実態としては飲み仲間です。平成29年にはこの会で台湾に行きましたが今回はこども医療センターで共に仕事をした嘉数真理子先生を応援しようと旅行先をカンボジアに決めた次第です。メンバーのうち3人が仕事や体調等で都合がつかず、また1人は直前に止む無く参加できなくなった

ため、当初の予定よりかなり少ない人数となりましたが他にカンボジア旅行の経験者として県立那覇病院時代からの内科の先生御夫妻も加わり、全員夫婦同伴での出発となりました。荷物の中には寄贈する予定の経皮酸素モニター2台に加え、各自お勤めの銘柄の泡盛がそれぞれのトランクに忍ばせてありました。これは事前の打ち合わせの際に、嘉数先生からの「もし良ければ…」という遠慮がちな表現の中に込められたリクエストに応えたものでした。

3. ジャパンハートこども医療センター

経由地の台湾からプノンペンへは約3時間半程の飛行時間でしたが到着の際に飛行機の窓から見たカンボジアの大地は赤茶けた地面が延々と続き、その中を大きな川が流れ、緑がわずかに点在するという非常に印象深い光景でした。プノンペン到着時の気温は40度!!でしたが湿度が高くないせいか、数字程の暑さには感じられませんでした。我々が訪ねて行ったジャパンハートこども医療センターはプノンペンから北へ35km、車で約1時間のカンダール州ウドンというところにありますがAsia alliance medical centerとして活動していたところに2018年6月に小児病棟が増築され、正式名称をジャパンハートこども医療センターとして同年8月より診療を開始しております。センターの建物は外壁が薄いオレンジ色を基調とした明るい、がっしりした平屋の建物で内部は受付、待合室、診療室、処置室、手術室、病室等と通常の病院の作りですが成人の部門とは扉を隔てて廊下でつながっていました。子供から成人までの一般外来及び入院診療に加えて産科の診療も行っており、また小児の病床数40床のうち小

児がんの病床が15床を占めていて固形がんを中心とした小児がんの精力的な治療が行われていることが特筆すべき点としてあげられます。固形がんの治療にあたっては小児外科との連携が必要なため、カンボジアではこれまで取り組みが遅れていたようですが同センターでは日本の医療機関との連携により外科手術も行われるようになってきているとのことでした。我々が訪問したのは日曜日だったため、実際の診療風景をみることはできませんでしたがその分ゆっくり説明を受けながら見学することができました。同センターでは小児、成人とも医療費が完全に無料となっており、スタッフの人件費を含めた運営の費用はすべて日本からの寄付金で賄っているとの説明がありました。診療内容としては鼠径ヘルニアや停留精巣などの通常の小児外科疾患に加えて上述の固形がんを含めた手術を中心に、小児科疾患では肺炎や喘息などの呼吸器系疾患やデング熱、膿瘍等の感染症が多い様です。外来患者数は月におよそ

200人、入院患者数は月に30~40人程度で小児がんに関しては開院後、累計で37人受け入れているとのことでした。

薬品や輸液製剤、注射器、ライン等の物品は最低限のものはあるとのことでしたが処置室や物品棚を見た限りでは余裕はあまりなさそうでした。また少しでも安く薬や物品を購入するために自分たちでプノンペンへ購入に出かけるとのことです。運営の厳しさも窺えました。詰所には日本人のスタッフに加えてカンボジア人の若い医師や看護師が何人かおり、将来的には彼らの様な現地のスタッフによる自立した運営体制を目指しているとのことでした。そのため教育、指導もまた嘉数先生らの重要な仕事になっています。彼らと挨拶を交わしましたが中には「皆さんは嘉数先生の同級生ですか」と質問する（もちろん冗談ですが）人もいて雰囲気のとよかさが伝わってきました。現在の課題としてマンパワーの不足や病床数・運営の費用の不足、病理を含めた検査体制の



病室



手術室



検査室



物品棚

不十分さ、食事や衛生面の指導が必要なことなどが挙げられていましたがそれでも給食センターを建設中とこのことで将来を見据えた事業の展開が行われています。

4. カンボジアの医療状況

近年のカンボジアは目覚ましい経済発展を遂げており、2018年の経済成長率はASEAN諸国の中で一番高いと言われていたようです。しかし1970年代には周知の様にポルポト政権によるおぞましくも凄惨、苛烈な支配の歴史があり、同政権崩壊時には医師は全国でわずか45人しか残っていなかったと言われております。その影響によりカンボジアはその後も長期間にわたって深刻な医師不足と劣悪な医療環境を余儀なくされてきました。最近の資料でも同国での乳児死亡率はおよそ日本の10倍以上と言われ、母子保健の向上も喫緊の課題となっていますが国立の母子保健センターがあり、日本のJICAの技術協力などもあって乳幼児を取り巻く医療状況も徐々に改善されてきているようです。また小児がんに関しては国内でおよそ600人程度と推計されているにもかかわらず実際に医療機関を受診するのはその3分の1の約200人に過ぎず、また先進国では約8割とされている治癒率がカンボジアの様な発展途上国ではわずか2割以下という話でした。この様な状況を克服すべくジャパンハートこども医療センターは国立小児病院、アンコール小児病院、Kantha Bopha小児病院など国内の主要な小児病院と連携し、固形がんを中心とした小児がんはもとより、手術が必要

な小児外科系疾患の患者さんはほぼこのセンターが受け入れており、カンボジアの小児医療で極めて重要な役割を果たしています。



嘉数真理子先生による説明

5. 帰途

訪問の帰り際に、ささやかながら私たちが沖縄から持参した経皮酸素モニター2台を寄贈し、センターを後にしました。プノンペンビル建設も盛んで活気と喧噪に満ちていると同時にある種の無秩序さもあり、ひと昔前の沖縄を髣髴とさせる光景もありました。しかし一歩離れると地方ではバスの窓越しから見ても貧しさや生活状況の格差は一目瞭然で、満足な医療など望むべくもないだろうことは想像に難くありませんでした。その様な光景を見るにつけ、ジャパンハートこども医療センターがこの様な地域に実際に医療拠点を築き、無償で医療を提供していることに心から敬意を表するとともに、今後もこのセンターが事業を継続していくために私たちができることを自問しながら帰途につきました。



経皮酸素モニターの寄贈